
夢は循環る。

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢は循環る。

【Nコード】

N7200S

【作者名】

サイルレン

【あらすじ】

とある青年は夢を見ていた。夢から覚めると、ユウトはアンドロイドの少女と不思議な出会いをする。彼女がユウトの元を訪れた理由とは？

夢を見ていたようだ。何の夢かはうつすらとしか覚えていない。漠然と怖かった。

まだ3時か。俺は呟く。全身から汗が吹き出していて非常に気持ち悪い。リビングの電気を点け、シャワーの準備をした。シャワーを浴びながら思い返す。何かに追いかけてて……何だっけ？いつものホラー好きが災いして、夢にも出てきてしまったのかな。

俺はその程度で済ませてしまった。

その後何が起きるわけでもなく、数日のうちに忘れた。

「お疲れ様です」

俺はちよっとしたおしゃれなカフェに勤めている。都内の某オフィス街で開いている店だ。そんな場所にあるので、行き帰りは時間がかかる上に疲れる。

ようやく家に着く。まずベッドの近くに鞆を置いた。

「うわぁ！」

もう一人の声が重なる。女の子の声。よく見れば、黒髪のボブで襟足にウェーブがかかっている。今どきの女の子そのまま。

「君は？」

恐る恐る聞く。桜の匂いをするのは気の所為だろうか。

「……名前はありますか。でも誰かに”リンネ”と呼ばれていた気がします」

輪廻。頭の中にその字が浮かんだ。電気を点け、ベッドに座っている彼女の前に椅子を持ってくる。

「じゃあリンネって呼べばいい？」

「はい」

違和感がある。無感情な声に、首もとのアザ。（実はアザではなくて、製造番号だったことに暫くして気づいた）

「君はもしかやアンドロイド？」

その問いかけに目を見開く。人間らしい表情なのに、人間臭さがなかった。

「分かるんですか？」

「うん、っていうか合ってるんだ。俺は……」

「ユウト、ですね？」

データベースにあります。真っ直ぐな目で言われた。とんでもないことに巻き込まれてしまったようだ。

「で、何で俺の家に居るの？」

「私、逃げているんです。私を作り出した人たち、私の能力が欲しいんです」

「能力？」

途方もないような話。俺は頭が痛くなった。

「それは人間が考えているようなものではありません。」人間らしさ”です。他のアンドロイドは、人間のようにつらつらと長く語るわけではない。でも私は違う。人間には劣りますが、表情を作ることも、感情を理解することも出来ます」

へえ。確かにぎこちないけど、ロボットには見えないな。

「ロボットじゃありません」

ごめんごめん。

「かくまってくれますか？」

小首を傾げるなんていう小技もインプットされているのだろうか。

俺は内心溜め息をついてから頷いた。

「良いよ、匿わなかったらどうにかなっちゃうんでしょ？」

「良いように使われるか、殺されます」

ユウト、これからよろしく。

やはりとんでもないことに首を突っ込んでしまったようだ。アパートの前の桜が、一枚だけひらりと落ちていった。

リンネ曰わく、この家は安全なんだそうだ。何故だか知らないが、彼女を追っている者たちは入れないという。

「じゃあ俺は行ってくるけど、外へ出ちゃ駄目だよ？」

「買い物も行かない？」

「俺がしてくるから」

何だか新婚さんっぽいね。くすつと笑つて言うが、彼女には分からなかったようだ。まあいいやって、頭を撫でる。リンネはぽかんとした。しかし、徐々に笑みを作った。一日のあいだで、かなり感情を表に出すことが出来るようになったみたいだ。

「いつてらっしゃい、ちゃんと待ってます」

いつてきます。手を振つて、俺は店に向かった。

ぼーっとしながら考える。どうして彼女は俺のもとに居るのか（少なくとも俺の家だけが原因とは思えない）。製作者、つまり追いかけてくる者はどんな人なのか。どうやってそれらから守ればいいのか。

悪の組織から守るようなキャラじゃないんだけど。先が思いやられる。

「そっぴいやお前、彼女いないのか？」

「最近別れたんですよ」

それに今はそれどこじゃありませんし。突然の店長の雑談を軽く交わしつつ応える。アンドロイドが家に居て、その人は追いかけてて……なんて言うなんて冗談じゃない、誰も信じまい。

「お前も早く結婚しろよー」

いやまだ24歳だから。思わずツッコミそうになるも、ガマンガマン。

「暫くはいいです」

そんなこと言うなよ。いつになくハイテンションな店長は俺の肩を叩いて去っていった。

俺は今度は実際に溜め息をついた。

「ただいま」

「おかえり」

パタパタとスリッパを鳴らしながらリンネが来る。本を読んだりテレビを見ていたらしい。それで表情を学ぶのだそうだ。吸収力は凄く、さらに人間らしさが増えている。

「変な匂いがついていきます。穢れてしまう」

彼女のその言葉にハテナを浮かべた。

「ああ、この部屋はなるべく桜の匂がいいんです」

何で？ ……特に意味は。じゃあシャワー浴びてくるよ。

「はい」

上手く交わされた気がするが、でも俺はシャワーを浴びて見えない匂いを流した。

「ユウトは桜の匂いがします。何か思い出せそうです、でも……」

「無理に思い出さなくていいから！」

このままだとヒートアップするだろ。それでも機械なんだから。そう言えば、落ち着いたのかゆっくり頷いた。

「あの、思い出した方が幸せなのか、そうじゃない方が幸せなのか。教えて下さいユウト」

「俺は、徐々にでいいと思うよ。だってずっと逃げるんだろ？」

「良いんですか？」

おう。今にも泣き出しそうな（アンドロイドが泣くのか知らないけど）表情のリンネが小さく「ありがとう」と言った。

「よし、飯だ飯！お前もそっぴい食べるんだよな？何でもいいか？」

「はい」

食べ物エネルギーに替える装置があるらしい。だから味も匂いも

分かり、食べることも出来るようだ。

俺はごく簡単にご飯を作り、リンネの前に置いた。彼女の目は若干輝いた。

……やっぱりアンドロイドには見えないな。あと数日で本当に人間になってしまうのではないか。俺は既に、彼女を人間だとみなしていた。

「美味しい」

良かった。部屋は仄かに甘い匂いがした。

ガタン。扉が開いて、誰かが忍び寄る気配。息を潜める。寝室の扉が開く。何者だ？リンネは大丈夫なのか？

ボタンと音を立てて扉が閉まる。素人の俺でも分かるような殺気。きっと玄人ではないはずだ、なら……！

俺のベッド脇で気配が止まり、何かを振りかざす。咄嗟にかいくぐり起きる。

「えっ？」

カーテンの隙間から漏れる光が、犯人の顔を照らした。

「リンネ？」

腕を掴んだ力が緩んだ隙に、彼女はするりと抜け出す。振り下ろされた刃物が腕を掠めた。血が滴る。それを見た彼女は瞬きをして動きを止め、ショートした。

「リンネ？しつかりしろ」

肩を少し揺らすと、ゆっくりと首をこちらに向けた。一、二度瞬きをする。

「ユウト？私、どうしました？」

濁らない目。俺は一瞬口ごもり、でも伝えた。

「何者かに操られて、俺を殺そうとした。コンピュータか何かを介して、乗っ取られていた記憶あるか？」

「……欠陥部分に、遠隔操作性ウィルスの介入痕が見られます。私

は、」

そこで区切る。何かを躊躇う素振りをみせる。

「ユウトを傷つけてしまったのですね」

大丈夫だからね。つい先程自分で手当てした傷口のガーゼは既に滲んでいて、未だズキズキと痛む。しかしかといってリンネを心配させるわけにもいかず、何でも無い顔をした。

「ユウト、私、逆探知かけてみます。穴くらいは見つかるともしれない」

流石に無駄じゃないかとは言えなかった。そのウィルスは常駐ウィルスであり、外部からのコンタクトは（製作者なら）容易のはずだ（それでも俺は理工学専攻だ）。

「うん、わかった」

リンネは目を瞑る。ぼそぼそと何かを口にするが、俺にはわからない。そのまま2〜3分して再び目を開ける。

「やはり製作者です。移動式の何かに乗っていて、この場所も知られています。音声以外ある程度は筒抜けのようです」

何でそこまで分かるんだ？疑問に思う。

「畏か？」

「わ、な……分かりません。でも痕の中に奴らの会話が少し含まれていたんです」

会話？俺は続きを促した。

「はい、掻い摘んで言うと、ユウトを殺せと。それから私が彼らの手元に戻るように。」

「じゃあやつぱり分かったか。ここにいちや危なくないか？」

いいえ、この方が安全です。でも…… とリンネは一旦口を閉ざす。真っ直ぐな目。

「ユウトは外に行ってしまう。そしたらまた狙われてしまいます」
目を伏せた彼女に微笑む。俺そんなヤワじゃないし。

「絶対に死なないでください。私のためには死なないでください。いざとなったら私を棄ててください。唯一の味方だった製作者がセ

ルフデリートの機能をつけてくれましたから」

「約束は守るよ」

暗に示すのは、何があっても守るということ。それを読み取ったり
ンネは、悲しそうに顔を歪ませた。

俺はもう、このアンドロイドに惹かれていたのかもしれない。

それから3日後、俺たちは何者かに追われていた。

「これ以上逃げられないよ、リンネ」

「諦めたらユウトが殺されてしまう！」

「返り討ちにしてやるんだよ」

そんな手立ても力もないけどな、と心の中で付け加える。だが、そ
う簡単にやられてしまうつもりも毛頭ない。

でもユウト！リンネが必死な顔で俺の腕を引っ張る。大した時間は
経ってないのに、随分と人間らしくなったな、と頬に指を走らせる。
きつともう、一緒に居られる時間は少ない。

「ユウト！」

「随分と逃げてくれたな、製造番号Z00517、コードネーム”
リンネ”。だがしかし、そのお陰で更に能力が開花したようだ。礼
を言つよ、ユウトくん。……さてリンネ、君の目の前で彼が死んだ
ら、完全な人間になるだろうね」

それは楽しみだねえ。気味の悪い声の主は、深くフードを被ってい
た。顔は見えないが、その高笑いには聞き覚えがある。

「……夢の奴か！」

俺を追ってきた人物。じわじわと追いながら、楽しそうに笑ってた
男。夢の中で俺は為す術もなく追われていた。現実なら対^{いま}抗出来る
だろうか？

「ユウトは殺させません。私、戻りますから。機関に戻る、だから」

「悪いがアンドロイドごときの意見など聞くひまはない」

なら、人間の意見は聞いてくれんのかよ？間を割る。

「言ってみろ」

「リンネを解放しろ。彼女はもう人間と変わらない」

「馬鹿な。哀れな人間は機械に魅せられたか」

人を小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「人間にしたがってたのはお前だろう」

まあ、それもそうだな。ではお前が助けてみる。ヒントを与えてやる。

「？」

「リンネはお前の大切なモノだ。ソレの記憶を植え付けて眠らせてある。それを思い出させてみる！」

先に死ぬなよ？と楽しんだ様子で奴は言った。俺の大切なモノの記憶……かと言って分かるわけもなく。暫く考えあぐねた後、奴は攻撃し始めた。

ユウト！何度もリンネが叫ぶ。お前、俺の名前ばかりだな、なんて心の中で思う。やはり現実でもじわりじわりと追い詰めてくる。

大切なモノ、大切なモノ……。俺の身近な人で誰か死んでいたか？しかも女の子。そんなの記憶には一切ない。では？

「まだ分からないか。さらにヒントをやろう。好みは変わらないよ」

足元には銃弾が叩きこまれる。足をもつれさせながらも逃げる。逃げているだけでは進まないで、動きつつ考えた。

好み。リンネは何と言っていたっけ。「桜の匂いが良い」そう言っ
てなかったか？彼女ではないが、何か思い出せそうだ。桜が好き？
大切なモノ？

「早くしないと、本気出すよ？そろそろお遊びはやめよう。十分な
時間とヒントは与えた」

そうだな。きつ、と睨みつけるが効果無し。リンネは少し離れたと
ころで怯えている。

「リンネ、お疲れ様」

銃口が彼女に向く。何故だ？体が勝手に動いた。

離れる！叫ぶのと同時に、守るように立つ。その時、はっと気付いた。桜の匂いが彼女を掠めたときに香ったのだ。

桜が好きで、大切なモノ。桜が好きと言っていた大切な親友。何処かへ消えた彼と桜の樹。春のとある日に。だからリンネの正体は：

：

「ハルだ！」

二人の動きが止まる。俺は奴とリンネに言った。

「お前は俺の親友だ。リンネは俺たちが大切にしていた桜の木だ。だからリンネに記憶なんてない。全てお前の幻想なんだろう？」

「何で分かった？リンネのことも俺のことも分らないはずだったのに。でもな、ユウト。リンネには記憶はあるんだ、桜の精なんだよハルは」

フードを取った彼は、想像通りの顔で。シュウノ。中学3年間ずつとつるんでいた奴。俺たちは綺麗に咲く桜を眺めるのが好きだった。"ハル"と名付けられたその木は憩いの場所となり、よくそこで語り明かした。その桜の精がリンネだというのはのか。

「私は、どういことですか？」

「シュウノ、どうしてアンドロイドなんて造ったんだ。リンネ——いやハルをどうしたかったんだ？」

「ハルを人間にして、ずっと一緒に居たかった。お前とも居たくて、リンネを超越した」

ハルが好きだったんだ。

「なら何でリンネに俺を襲わせた？」

それを言うと、彼女は体を大きく震わせた。

「それは俺じゃない！」

目の前に降り立ったシュウノは昔と変わらない目で言った。真っ直ぐな強い目だ。

「……俺はお前を傷付けるつもりはさらさらない。思い出しても、思い出さなくても、俺はお前とハルと一緒に生きようと思った。二

人とも俺のものだ」

反逆分子に盗聴され、彼らが俺の攻撃を命令したようだった。

シュウノを裏切った奴らは近くにいます。そして彼やリンネは狙われてしまうだろう。

「思い出しました。いつも遊んでくれたのがユウトとシュウノだったのですね。だから私は桜の匂いを纏ったユウトを懐かしく思ったんだ……」

リンネが言い終わると、シュウノは手を差し出した。ちらりと彼女は俺を見てから手を取った。その二人の背中を押して、彼女に耳打ちする。

シュウノを連れて遠くへ。その言葉に躊躇いがちに頷いて走った。離れたところからクソツ、という声が聞こえる。俺はシュウノの残した銃を手に取り、そいつに向かって発砲した。

慣れないため銃弾は少しずれ、窓ガラスを叩き割った。散らばったガラスがそいつの身体を引き裂く。俺のところまでそれが降ってくる。俺は逃げなかった。

「知ってるか？三人じゃ一緒には生きていけないんだぜ」

おに残りの裏切り者、あいつら追うなよ。そう叫んでから、プツンと意識が途切れた。

夢を見ていた。ざっくり言うとなんか死んだのだと思う。しかも無くなった。起きてみて夢だと分かる。死んでないんだ、俺は。珍しくハッキリと夢を覚えていた……数日もするば忘れてしまうのだろうか。

ゆっくりと起き上がったとき、目の前に見えたのはピンクの花びら。昨日までは無かったはずなのに。

「シュウノ、ハル……」

無意識に零す。夢のはずだ。夢のはずだけれどリアルだった。桜の小枝と、腕の傷痕。不思議な事象に首を傾げる。

現実では、ハルは枯れていてもう会えないし、シュウノとも二度と逢えない。結局生き残ったのは俺だけか。あの夢は懐かしくて、もっと二人と一緒に居たくて。

仕方なくリビングに向かおうとしたら、全身に痛みが走った。え？まるで夢の中のようにガラスが身体中に突き刺さったよう……夢のように？桜の花びらが散っていく。そういえば今は夏だったような。

これもまた夢なのか。

そう思った瞬間ブラックアウト。遠くで温かい手が俺を撫で、優しい声が聞こえた。あの日のように、また三人で桜の木の下に居られたら。その思いすらも夢の向こうに消えた。どれもまた夢なんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200s/>

夢は循環る。

2011年8月29日16時49分発行